

令和8年3月9日（月）

# つながる アートプロジェクト 実施報告書

～離島中学生と特別支援学校による、  
共創型オンライン美術交流～

株式会社 ANA 総合研究所  
地域連携部 研究員 大西佐知子

## 目次

|                               |   |
|-------------------------------|---|
| 1. 本交流の目的・・・・・・・・・・・・・・・・     | 2 |
| 2. 実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・       | 2 |
| 3. 授業の様子・・・・・・・・・・・・・・・・      | 3 |
| 4. アンケート結果と成果の分析・・・・・・・・      | 4 |
| 5. 教職員・関係者による評価と成果の分析・・・・・・・・ | 7 |
| 6. おわりに（本事業のまとめ）・・・・・・・・      | 8 |
| 【付録】生徒たちの声（自由記述）・・・・・・・・      | 9 |

## 1. 本交流の目的

### (1) 交流実施における社会的背景

特別支援学校学習指導要領に基づき、障害のある子供たちが地域の人々と触れ合い、社会性を育む「交流及び共同学習」をオンラインで実施。ICTと美術を組み合わせ、従来の対面交流の困難さを克服する新たなモデルを目指しました。

### (2) 地域格差を越えた「相互補完」と教育の機会均等

・離島(伊子茂中): 固定化されやすい小規模校の集団において、多様な生徒と交流することで社会的視野を広げる。

・都市部(臨海青海): 奄美群島の豊かな自然や文化(島の生き物、青い海等)を擬似体験し、地域を尊重する態度を養う。

### (3) 美術科・造形活動を介する意義

直接的な言語コミュニケーションのみに頼らず、共同制作作品という造形物を媒体とすることで、自己投影や非言語による共感を生み出し、心理的障壁の低い交流を実現します。

## 2. 実施概要

参加校: 鹿児島県瀬戸内町立伊子茂中学校、

東京都立臨海青海特別支援学校

実施期間: 令和7年度 第2学期～第3学期

主な交流内容:

- (1) 事前学習: 学校紹介動画の交換・鑑賞
- (2) 第1回交流(12月18日): 「こんにちは! 色の交換スクラッチ」。  
相手の地域の自然や生き物を想像して描くスクラッチ技法による交流
- (3) 第2回交流(2月12日): 共同制作「大漁旗」  
郵送交換した布(下絵: 伊子茂中は「島の生き物」、臨海青海は「お台場の景色」)の相互着彩
- (4) 事後学習: 完成後の作品披露会(作品展での展示)

### 3. 授業の様子



第1回オンライン交流(色の交換スクラッチ)



第2回オンライン交流(ふたつの海)

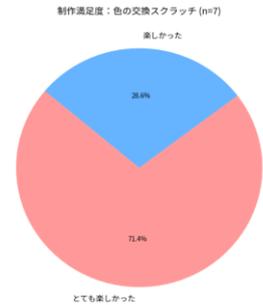


## 4. アンケート結果と成果の分析

### (1) 第1回交流:アンケート結果と成果の分析(伊子茂中学校)

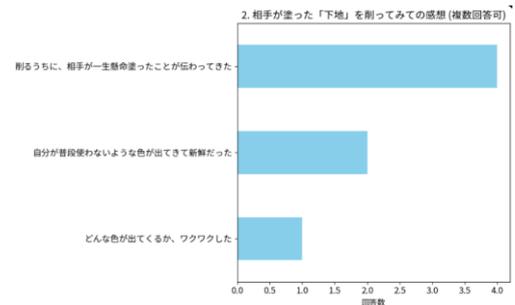
#### 1. 制作満足度

スクラッチ・アートの制作に対し、回答した生徒全員が肯定的(「とても楽しかった」または「楽しかった」)な感想を抱いています。71.4%が「とても楽しかった」と回答しており、活動への関心の高さが伺えます。



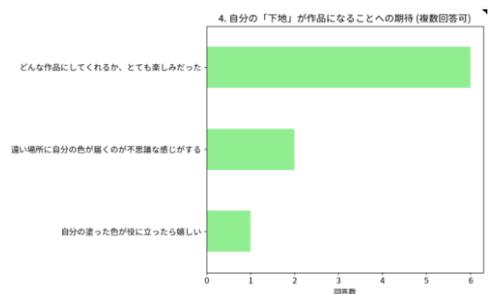
#### 2. 相手が塗った「下地」を削る体験

臨海青海特別支援学校の生徒が塗った「下地」を削るという非言語的な交流において、57.1%の生徒が「削るうちに、相手が一生懸命塗ったことが伝わってきた」と回答しました。これは、作品の背後にある「他者の存在や努力」を、造形活動を通じて直感的に理解したことを示しています。また、「自分が普段使わない色が出てきて新鮮だった(28.6%)」など、色彩を通じた新たな発見もありました。



#### 3. 自分の「下地」が作品になることへの期待

自分の塗った色が遠い東京の学校で作品になることに対し、約67%の生徒が「どんな作品にしてくれるか、とても楽しみだった」と、共創への強い期待感を抱いています。一方で、「遠い場所に自分の色が届くのが不思議な感じがする」といった、オンライン交流ならではの物理的な距離を超えた不思議さやワクワク感も共有されました。



#### 4. 相手校・生徒への興味の変化

交流を通じて、100%の生徒が臨海青海特別支援学校やその生徒に対して「興味を持った」と回答しています。初めての交流を経て、遠隔地の仲間を「一人の表現者」として認識し、心理的な距離が縮まったことが分かります。

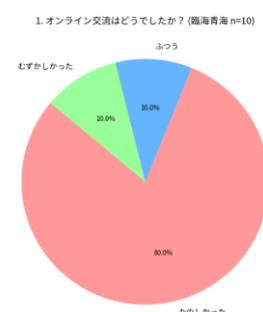
この第1回のポジティブな反応が、第2回の「大漁旗」共同制作における信頼関係と「美術を楽しむ仲間」という意識の醸成へと繋がっています。



### (2) 第1回交流:アンケート結果と成果の分析(臨海青海特別支援学校)

#### 1. 交流の充実感

たのしかった(80%): 10名中8名の生徒が、初めてのオンライン交流を「たのしかった」と回答しました。ICTを活用した遠隔地との出会いが、生徒たちにとって非常にポジティブな体験としてスタートしたことが分かります。



## 2. スクラッチ技法による発見

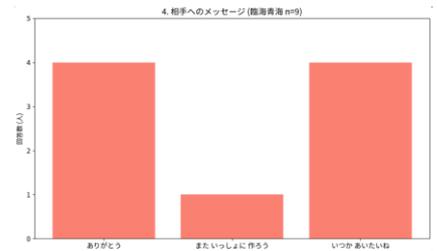
色の出現(60%): 6名の生徒が「たくさん色がでた」と回答しました。伊子茂中学校の生徒が塗った「下地」を削ることで、予期せぬ色彩が現れる驚きが、造形的な興味を引き出しました。

## 3. 相手(伊子茂中)への親近感

すてきな色だった(80%): 相手が塗ってくれた色に対し、8名の生徒が「すてきな色だった」と回答しています。これは、直接会ったことのない遠隔地の友達が「自分のために塗ってくれた」という行為そのものへの肯定的な受け止め(共感的鑑賞)が成立していたことを示しています。

## 4. 相手へのメッセージ

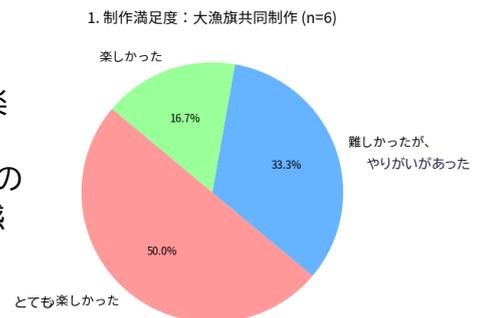
「ありがとう」と「いつか会いたい」: 交流直後のメッセージとして、「ありがとう(4名)」と「いつか会いたいね(4名)」が最も多く選ばれました。一回の交流で、すでに「物理的な距離を超えた再会」を願うような、深い他者理解と友情の芽生えが確認されました。



## (3) 第2回交流: アンケート結果と成果の分析(伊子茂中学校)

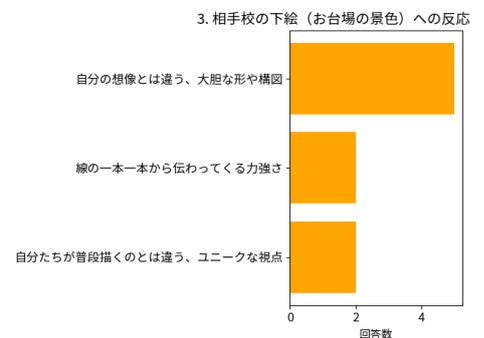
### 1. 共同制作の満足度

第2回の活動についても、回答した全生徒(100%)が「とても楽しかった」または「楽しかった」「難しかったが、やりがいがあった」と肯定的に回答しています。布という大きな素材を使い、遠隔地の仲間と協力して一つの作品を完成させるプロセスが、高い達成感に繋がったことが伺えます。



### 2. 相手校の下絵(お台場の景色)への反応

臨海青海特別支援学校の生徒が描いた下絵に対し、最も多くの生徒が「自分の想像とは違う、大胆な形や構図」に驚きと面白さを感じています。自分たちの当たり前とは異なるユニークな視点や、線一本から伝わる力強さが、伊子茂中の生徒たちの見方や感じ方を広げる重要な刺激(鑑賞のねらいの達成)となりました。



### 3. 共同制作を通じたイメージの変化(心のバリアフリー)

プロジェクトの核心とも言える成果が、このイメージの変化に現れています。「障害の有無や距離に関係なく、同じ『美術を楽しむ仲間』だと感じた」という回答が最多となりました。また、言葉を使わなくても作品を通してお互いの気持ちが伝わることを実感しており、美術という表現活動が「共生社会」を実現するための有効な媒体であることを示しています。

#### 4. 自由記述に見る生徒の声

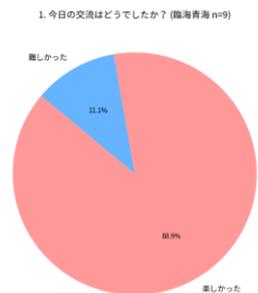
- ・交流の喜び: 「お台場の景色が描いてあってお台場ってこんなところかな～と想像できた」
- ・相手への想い: 「相手が何を考えて絵を描いたのかを想像しながら描いた」  
「障害を持っている事を忘れて同じ生徒として過ごせた楽しい時間だった」
- ・制作への没入: 「色使いがきれいで色とりどりで私も自由な色使いをしてみようと思った」  
「細かいとこまでかけていて塗るのが楽しかった」

#### (4) 第2回交流: アンケート結果と成果の分析(臨海青海特別支援学校)

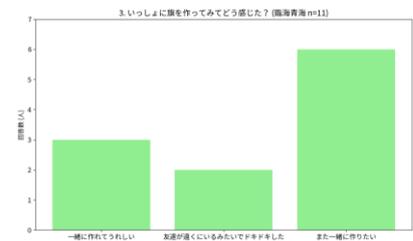
第2回共同制作後のアンケートから、生徒たちの内面的な成長が確認されました。

##### 1. 交流の満足度と情緒的反応

非常に高い満足度: 約89%(8名)が「楽しかった」と回答しています。



遠くの存在を実感: 交流を通じて「遠くに友達がいるみたいでドキドキした(2名)」や「また一緒に作りたい(6名)」という回答が見られ、画面越しの相手が「実在する仲間」として認識されています。



##### 2. 鑑賞を通じた意欲の向上

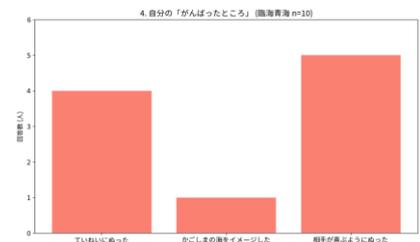
作品へのリスペクト: 伊子茂中の生徒が手を加えた作品を見て、「色がきれいだった(5名)」 「もっと見てみたい(5名)」と回答が分されました。

発見の喜び: 自分が描いたものが相手の手によって変化し、価値が高まったことをポジティブに捉える鑑賞能力が育まれています。

##### 3. 他者視点に立った表現(A表現)の深化

「相手」を想う制作: 自分ががんばったところとして、最も多かった回答は「伊子茂中学校のともだちが喜んでくれるように塗った(5名)」でした。

意図的な構想: 「ていねいに塗った(4名)」や「鹿児島島の海をイメージして塗った(1名)」という回答も含め、相手に届けることを前提とした主体的な表現態度が確認できます。



#### (5) 生徒の変容: 自由記述の質的分析より

数値データが示す高い満足度の背景には、生徒一人ひとりの深い「共感」と「発見」がありました。

例えば、スクラッチ画の制作において、相手の塗り方から心情を読み取ろうとする姿(第1回アンケート)や、共同制作において相手の感性を自分の感性と混ぜ合わせようとする試み(第2回アンケート)は、まさに共生社会における「他者への想像力」そのものです。

これらの声は、美術科における資質・能力が、交流という文脈の中でより豊かに育まれることを示唆しています。

## 5. 教職員・関係者による評価と成果の分析

教員および関係者による事後アンケートに基づき、教育的成果を以下の2つの視点でまとめました。

### (1) 学習指導要領に基づいた生徒の変容

多様性の受容と他者理解：回答した教職員・関係者全員(100%)が、生徒の中に「多様性を受容する心」の変容が明確に「見られた」と評価しています。

共創プロセスの価値：大漁旗を完成させる過程で、生徒が自発的にアイデアを出し合い、協力し、相手を気遣う「思いやりの心」が育まれていく様子が観察されました。これは単なる作品制作を超え、生徒同士の「思い出づくりのカタチ」として結実しました。

成功の指標としての「笑顔」：最初はお互いを知るところから始まりましたが、最終的に多様性を認め合う気持ちが育まれた結果として、「生徒の最後の顔つきが非常に良い笑顔であったこと」が最大の成果として挙げられています。

### (2) 遠隔地交流・オンライン手法の有効性

物理的距離の克服：離島と都市部、特別支援学校と一般校という異なる環境を結ぶ意義について、回答者全員が肯定(そう思う)しており、極めて有効な交流モデルであると評価されました。

ICT活用の安定性：初めての試みながら、回を重ねることで良好な連携が構築されました。オンライン特有の不具合や調整も、その都度柔軟に解消することで支障なく進行できました。

見通しをもった学習：事前にスライド資料等で流れを共有したことで、生徒たちが活動の見通しを持ち、安心して制作に取り組むことができました。

### (3) 運営面における今後の課題と提言

教員(関係者)アンケートより、今後に向けた具体的な改善案が示されました。

プロセスの可視化(ストーリー性の強化)：交流当日だけでなく、事前制作の様子(オフショット画像等)を共有し合うことで、一連の物語としての完成度を高め、より深い共感を生む工夫が望まれます。

リアルタイムでの「完成」共有：現在は事後報告になりがちな完成の瞬間について、「オンライン交流中に作品が完成するように配分する」ことで、その喜びをリアルタイムで分かち合う演出が提案されています。

相互の刺激を増やす工夫：生徒が自分の制作に没頭して相手の様子を見逃してしまう場面があったため、制作中の細かな様子をより積極的に見せ合い、刺激し合える仕掛けが必要です。

## 6. おわりに

本プロジェクトは、離島と都市部の特別支援学校という、物理的にも教育環境も異なる二校を「美術作品」という共通言語で接続する挑戦的な試みでした。

アンケート結果からも明らかなように、生徒たちは「スクラッチ画を削ることで相手の存在を知り」「共同制作の下絵に互いの感性を混ぜ合わせる」といった体験を通じ、言葉の壁や障害の有無を越えた深い繋がりを築くことができました。画面越しに弾ける生徒たちの笑顔は、ICT を活用した共創型の学びが、子供たちの心のバリアフリーを推進する強力な一助となることを証明しています。

最後になりますが、本事業の実施にあたり多大なるご尽力を賜りました各学校の先生方、ならびに企画・運営を支えてくださった株式会社 ANA 総合研究所をはじめとする関係機関の皆様に、心より深く感謝申し上げます。今回の確かな成果を基盤とし、今後も多様な子供たちが共に学び、感性を響かせ合うことのできる教育実践の輪を広げていけるよう、一層邁進してまいります。

## 【付録】生徒たちの声

## 伊子茂中学校（自由記述）

- 2回の交流ありがとうございました。いつも同じメンバーでやっているからこの人はこういう作品を作るんだろうなとかどうするんだろうとか発見はあるけど特別支援学校のみんなは自分が想像していた色とは違う色でカラフルに塗ってくれてすごく面白かったです楽しかったです。また機会があれば交流できるといいです。これからも頑張ってください。
- 皆笑顔で楽しそうでこっちまで楽しくなりました！
- 皆さんの好きや特技を全力で伸ばし、幸せな人生を過ごしてください。
- 2回も交流してくれて、ありがとうございました。みんなが楽しそうに笑顔で私達の絵を描いてくれて嬉しい気持ちになりました。

## 臨海青海からのメッセージ

4. 「いこもちゅうがっこう」のおともだちに メッセージをおくりましょう！

[♡ ありがとう] [🎨 また いっしょに 作ろう] [🏠 いつか あいたいね]

じゆうに書いてください。

えがじょうずすぎでびっくりした。

5. 「いこもちゅうがっこう」のおともだちに メッセージをおくりましょう！

[♡ ありがとう] [🎨 また いっしょに 作ろう] [🏠 いつか あいたいね]

じゆうに書いてね

ありがとうたのしかったです。

5. 「いこもちゅうがっこう」のおともだちに メッセージをおくりましょう！

[♡ ありがとう] [🎨 また いっしょに 作ろう] [🏠 いつか あいたいね]

じゆうに書いてね

たのしかった  
おてしきり  
はがき  
メッセージ  
またやりましょ

5. 「いこもちゅうがっこう」のおともだちに メッセージをおくりましょう！

[♡ ありがとう] [🎨 また いっしょに 作ろう] [🏠 いつか あいたいね]

じゆうに書いてね

またいっしょに作ろう  
いつかあいたいね  
ありがとういっしょに作ろう  
ありがとうまた

5. 「いこもちゅうがっこう」のおともだちに メッセージをおくりましょう！

[♡ ありがとう] [🎨 また いっしょに 作ろう] [🏠 いつか あいたいね]

じゆうに書いてね

① 対ハートオブジェをつくらう

② ありがとうね





共同制作:「お台場のうみ」

描画:臨海青海特別支援学校 着彩:伊子茂中学校



共同制作:「奄美のうみ」

描画:伊子茂中学校 着彩:臨海青海特別支援学校